

よまたがひて。たのふれあそぶ何の罪科有べし。試みいひ
 てみる。抑松の位の女。いとけなきより物よみ手習ふ。心
 をよせ。數嶋の道も及ばずながら。古人の讀捨もあぢりへ。茶
 の數寄花のもてあそびも。仕覺へ。十炷香貝合あんど。常の
 慰。朝夕身のえつけ。氣を付。かりも。行儀を乱さず。立居振
 舞。閑然なれば。中く。十人並の分限者の息女。とても。是程よ
 の育がたし。買て遊ぶ人も。十人並の分限はづれね。釣合が
 たし。天職鹿戀も。是も。准知べし。西鶴が筆端。文竜が書捨。事
 奮たれば。詳よ。あたらず。去ながら。昔の吉野。いよしへの高雄
 なんとが身探り。今の遊里も。學得る人もなし。何事も時々の
 風と。いひあがら。戯女の情も。次第いやく。世智なるぞ
 悲しき。是も。金銀づくの世と成て。上邊の潜上を。是と心得た

るより。買手もひすらこく。女郎もさもしくなれり。往昔の翠
 黛江粉より。後腰のしつけまで。氣をつくしたるをぞ。傾城
 風といひしよ。今其風。町方。移りければ。かへつて。初心
 めけるどて。素貞。素足。後皺も。あらためず。繕あきを。此里の
 色と定む。されども。捨情の尻目。づかひと。繰出しの。八文字の
 和朝の三筆。其筆跡。水垢ぬけて。今も傳へて。残り。昔の女
 郎一人の心。よて。意氣も。張も。偽も。實も。器量次第に。配しよ。此
 頃の誓紙書。よも。親方交相談の上。指切。よも。寄合付て。衆儀判
 の上なれば。ばつとしたる。せんさく。二人。寢夜の密説も。夜番
 まで。ひいき。別れの床の耳雜談も。宿老へ。聞ゆ。人のえらぬ所
 よこそ。戀も。情もある。物を。さらし物。よして。笑草。よせらるる
 段なれば。今時の傾城。買の。生身の。狐狂する。よて。ぞ有けり。惣

本寺の島原新町吉原より件のごとく正しからざれば。白人
呂州茶女臭屋間短蹴倒夜發まで同じ習ひも移り行。まかれ
ハ黨連謀計の継みのびし鼻毛を抜て。家職大事の眼を開く
べきことぞかし

(四) 大夫の櫻顔なるの段

大夫の櫻顔あるも。惣嫁の紫陽花風成も。立よりて見る内
己が花よして。立のけハ法界の花。それよ指を切らせ髪を
切らせて悦ぶ。法界の花の枝を打科なれば。盗人同前。それ
程執心ある花ぞなら。己が前裁も移して詠ざるぞ。又
つとめの身の親方次第も。身の賣物客一人も心をつくし
て。余の客を外よする事道もわらず。百人が百人。千人が千人
ながら詠むる人も同じく詠らるゝぞ誠なるべけれ嘘つく

が役。偽が所作なれば。泥愛も否背も客よよりて變化し満遍
よして尾頭なくもつてまいる筈。つとめ。勤戀の戀と。客
よよけへだてあるは。親方の否がるこそ尤といふべし。扱偽
といふも。化のばけす。化。虚の化。實の化あり。骨長の狐なら
で此妙を得ず。禿立の新船が見あらひも。化てみても頭の鬘
體が幾度か落ちて。終る尾を出すも至る。化の化が虚の化な
るゆへぞかし。白人呂列茶女も大形かゝる化もなし。か定ま
りの習ひの化のみ。まかし局堀の洞より八間の敷をく。り
細手の綱渡りして。八坂の塔の椽を算知より悪功を経て人
の鼻毛もよみ覺ゆる族の晝中も尾の見せず。中より下の豹
人の油鼠をまてやられ。取かへしもならず。化され損なし。扱
上々の化物の。葬禮仕立の床入も。只も衣装も垢づかず。白き

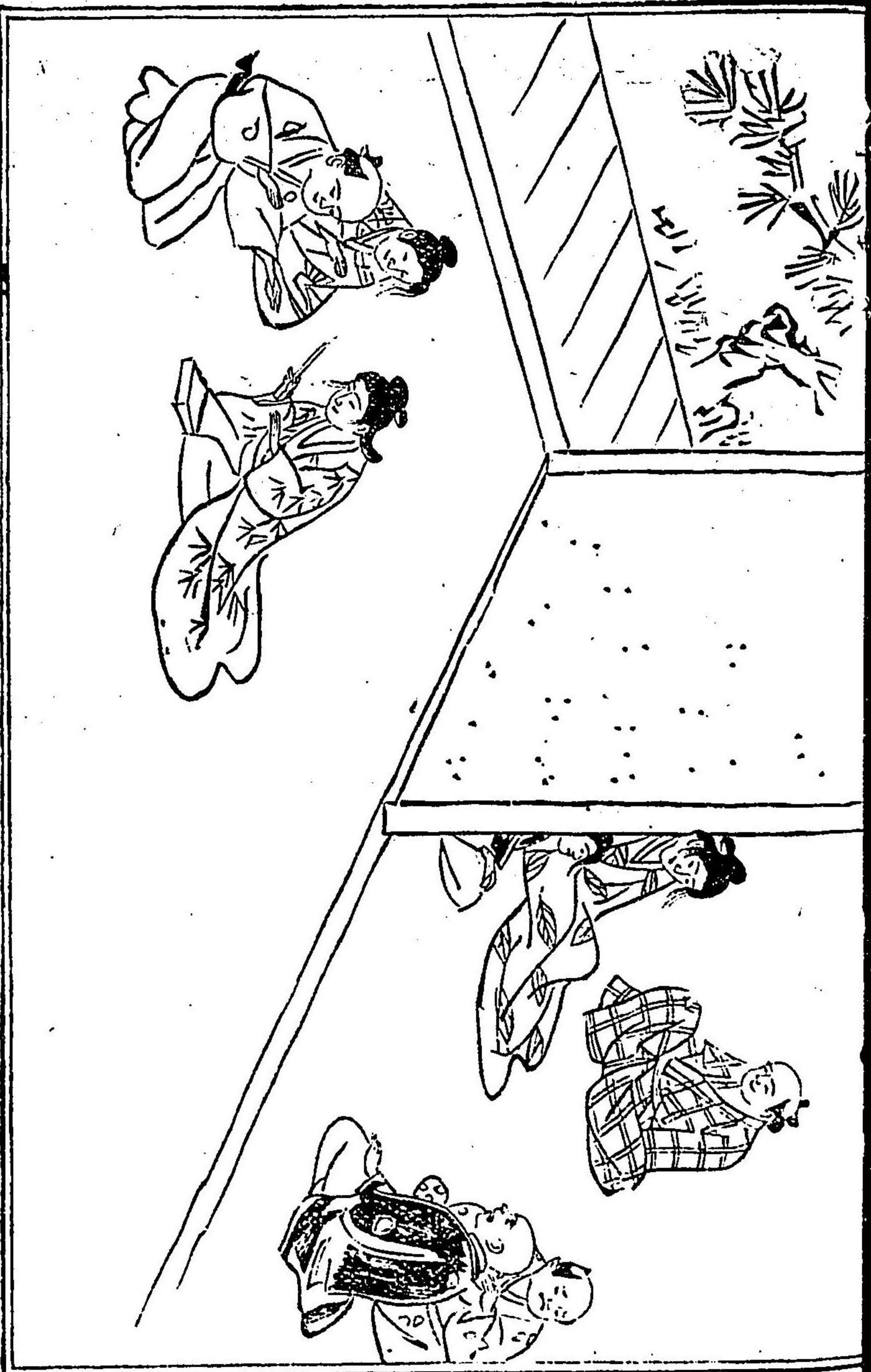
が上の白狐。その色かひらぬ常盤成。松の位まきくひなし。天女の假の形も見とれて。鳥居を飛し質の姿をわすれ。逢夜のうれしさよひむねの月くらみて。身代の足本も見へず。別朝の悲しさよ。後髪をひかれて。又寝の床の落し穴も坎入。かたさまあらず。と書しぬ。開山の名号より有がたく。友の便の言傳。土神の託宣。開程尊く成てから。魂鼻の先を住家として。隣下の本宅もかへらされ。親のいさめ世のそしども。いつかないかな。それほどの化し手は。並や通途の伯藏主。よのあらず。それを釣とめんとする。狩人も度々の輪繩も金銀をついやし。いくばくの工夫をかめぐらしけん。釣人もつらる。狐も。果の直化質の化。質が嘘もてうそが質誠も誠が出合て。その跡またふ篠田妻妹背の縁とも成ものぞ。すれば

千金を捨るも。只打見ばかりの色よはあらず。詮の誠の一字を買得たる物也。誠が買れぬと見たらば早くやめるが。商上手。化されしと思ひ。安達が原への近づくべからず

(五) 戀せずばの段

戀せずば人の心なからましを據所として。彼處の娘を細尋。爰の下女を誑すを戀と思ふ。役體なし。下戸ならぬこそを後立よして。小間物見世莊の大戯氣也。眞の心ざしをはこびて。末のどけな。歌の本意もかなふべし。月花の詠も興よ乗じて。呑客人の應答も和を本として。盃をかひさば下戸ならぬの深を得べし。悪左禮も少女をうかれさせ。性根を失ふ程酒をくらひて。何れ成事ぞ。武藏も去方の近習勤する男。本より人跡よく萬事器用もて。出頭日を増より。祿もかさね

ぐたまわりて。くらしも豊成けるが。いつくより日本堤
 の景色も泥みつよく通ひし。男ぶりのよくからで。女郎も
 外をやめても此男もと染付。たがひも遠ざかるをかなし
 み。只みねバ苦も成。聲を聞ねバむねこがれて。便の多もとり
 やりも。間もなく千束もつもり。儂の身も添ながら。眞の肌も
 觸ざるをきのどくがり。川があるといふて送せ。早く開た
 ふあり。待といふみよの逸足もおそきやう。よて。昨日の名残
 を今日へ續たし。今日残多きが明日へ持こして。二年あまり
 我身をもわすれて。通ふ程も。夜々の睡言も次第もふかみへ
 入て。或時女郎のいひける。件引網のもらさぬ契する我身
 ながら。か程まで裏表なく。やかひせしうへ。かたさまも
 しほ内さまや。おのします。左もなく。の末の此身のかたさま



圖五第鑑通道艶

へまかせたきねがひよし。いかゞと問れて此男。女房もあ
ま子も二人まで持ながら。つねとそなたより外思ふもの
なしといひし言葉の反古もならべ。恨みられんがめいわく。
當座のがれ。曾て妻子もなしと答ければ。いどいられしき
貞さしめて。それよります。一。またしめり。夫大形女郎狂の
かもしろき。外の客もまたしむをせき。若移り氣やと探り
見つ。どふか。ふかのその中。うれしさもあり。腹も立て。此
浮沈がほり。わひ。また。それがたのしみなる物ぞ。一向とん
と身もつけ。早鼻もつく。世のならひ。此男もそろ。秋風
吹そめて。さながら。増花も移る。もあらねど。これまでもし
て。足を止め。なん心もかゝる。末が。おそろしさもぞ有ける。
其後のみをこそせ。返事せず。その方の便にかつて。絶果け

るよ。彼女郎いかゞして聞けるよや。妻子有ての色狂よ。我を
 はめ玉ふそと。思ふより胸ふさがり。食事も絶て泣臥。身力つ
 かれ色あらく。床又つくより起あがらず。その十日ばかりよ
 彼男も。風の心地といひけるが。是も悪寒發熱して。枕もあが
 らず病臥ぬ。一門他家の歴々入かり立かり見舞けるよ。
 此男の身振りさながら傾城の形をなし。足踏出し襟又只入
 て。物いふこと葉皆此里の物真似なり。いづれも打寄かあら
 み。いかゞせんといふよ。内室のいれし。是いたしかよ。彼
 遊女の生靈あり。恨の段もかねく。聞ひよ余儀なし。我身よ
 まかせ玉へとて細くとみしたくめ。彼女郎へつかいせり。
 其みの内よ我等の家出して。そのかたを内かたよそなへや
 すべし。二人の子共もそのかたの子と思ひ。そだて給へるべ

しと。わらゆる神かけて。くどくどまて書こされしかども。最
 早病おもく。みの返事もせで。終よ空しく成ぬ。七日も經すし
 て此男も又死ぬ。あはれ成物がたりならずや。是當座の慰と
 思ひて。益なき情言葉がはじめの手前も偽と思ひていへど
 も。不便かさねて。その偽がいつのりといはれず。誓言誓紙
 よ及ぶものぞ。それを立れば。こなたが立す。すべきかたなく
 捨しゆへ。恨のたねと成けるぞ。此男が俳諧名を杜若とい
 ひし。扱ひ女郎の八橋といへる成べし。それゆへか。蜘蛛手よ物
 をぞ思ひ死よなりぬらん

(六) 濡ども花の陰よの段

濡ども花の陰よ宿らんと。櫻符の名哥を。行成卿よ笑ひれて。
 それが喧嘩よ成て。かたやかならぬが。僻事よ。哥枕みて。参れ

と。東路よさそらひ。阿古屋の松を尋ね行し。陸奥の笠島よ
 て。馬の尻追男が。爰成神の物とがめし玉ふ。下馬して拜き玉
 へ。とことりしを。何條さやらの泉神。幣も柏手も及ぶべ
 きぞとて。乗打したる。又忽馬すくみ落馬して卒去し玉ひぬ。
 魂都を戀して。臺盤所も來る。これを入内雀といふ。其靈魂を
 賀茂も祭と。橋本か岩本かたしか。又和哥の神と祝われ玉ふ。
 ぞれよつきて三戸郡澁谷といふ所。森々たる岡山。玉垣
 かこふ一社あり。金勢神を祭と俗よかなまら明神といふ。男
 の精分よりりて。左歸圓も地黃も。杖またらぬ程の者も。此神
 よ祈て。厚紙の障子を裂と。笠島の神も同じ誓のよし。思ふ
 よいよしへ夷の國。神の恵みも尊とさ知らぬ。頑ものよ欲
 より引入させたまふ。同塵の。利生。道祖の神とす。猿田彦

よて。本より和國の戀知神よて渡らせ玉ふ。さすかの質方朝
 臣。神秘のふかきを嘲玉ふよよりて。冥罰立所。あたり玉ふ。
 是又末世のまめしか。大原の雜駭。兼も。むかし沼。住大蛇の。
 女をとりて服しけるを。いふせかりて男女打まじりて。そ
 の夜を明し。その夜。又縁を結びそめて。長きかたらひと成方
 便つれなき人の。鍋の數見んと讀し。筑摩の祭も。性惡女を耻
 しめて。眞の縁を結びしめ給ふ。善巧まこと。又事わかれ品
 いかはれども。和光の御慈いやしき。凡夫の肉眼よして。評判
 すべからず。つらく思ひ。厚く考へて。おろそかよおもひた
 てまつることなかれ

(七) 大名持の小娘の段

大名持の小娘。幼稚より目鼻口の間尺。よ遊ねば。脇よ猿猴骨

が有て盗根性なるとても。肩も弓箭盛がすわりて。末ては首
 が落るとても。それより構はず磨琢も艶を出し。腰骨縫れる
 程まめつけ。太き指も金はめさせ無理細い。ためいれ。毛
 生丸のほかけよて。生れつかぬ額を耕かんと。悉皆作花も水
 打物よて。自然とそなへし美景もあらず。人いかに鈍な
 るとても。それを請込大名の大様なれば。尤も中立する虎落め
 から。落る地獄の責が見たし。欲の皮が千枚道具もなればと
 て。戻り娘を手入らず。仕立て。二日も三日も味をすくらせ。
 手付の捨金取を眼前の利も覺て。かつて情の道を思はず。縁
 づくといふもの。松山の涙こそ末をこそ大事よすべきを。
 當座賄さへ濟ば。跡の野も伏薦かぶりでも。開た眼で見ると
 のもなく。なし果ん事むごいどやいはん淺間しどやいふべ

き。それでも爵があたらす。佛も神もうその皮。やみらみつ
 ちやな貞ながら。黒木戴し女の中。二の瀬の眼一きらひて。
 市原で馬追する縁こそ。かいらぬ契どうらやましけれ。上京
 邊の歴々の物領西島の色狩も金銀を蒔捨て。指引のめ括も
 手味噌の匂がうつり。それが親仁の鼻も入。烏散臭も嗅つけ
 て。それより薦がほつれ。藪が見だれて。搦へかね。一先身を
 ひそめしが。時々の心ようつりて。北野邊の茶女も打込。松の
 木の輪切枕を。ありし天鷲兜の房つきも仕かへて。飽は休す
 る山谷心も成て。樂みつきて悲しみも。又たのしみとそれな
 りも。手鍋の飯のゆるやかも。水雑炊もしれぬ中。身の埋木も
 ましよして。心の花を手て咲せ。色を捨ぬ世の渡り。其女さ
 へ追出さば。親の跡式は相違なくゆづらんどいへども馬の

耳の風。これをぞ戀の眞といはん。飯の上の蠅。追心中。行つ
き。的當の舟引心中。眞の心中。又のあらざるべし

(八) 清水寺よつしきての段

清水寺よつしきて。北斗堂。靈山寺。法觀寺。昔の勅額。の梵刹。費
をあらべ。不斷念佛の僧侶。一生不犯の沙門。草の戸を結。紫の
庵を構へて。石み。酒肉をいましめ。制札。又。猥が。のしきを止
めす。こふる。清淨の靈地。なりし。今。桂の橋柱も。ぬけ。あど
大根のみ根。入ふ。かく。山の井の流も。次第。又。涸て。小便。又。水
勢。まされり。され。べいつし。か。淫婦。屠兒の。栖居。と。成。搔立。し。法
灯。の。夜店。の。行燈。も。か。なり。焼。え。め。し。香。煙。の。樺。燒。の。よ。ほ。ひ。よ
變。ず。鼠。鳴。が。簾。を。潜。り。て。編。笠。の。後。甲。を。抓。暖。蔵。が。風。又。動。て。家
名。ぞ。人。を。招。く。垂。腹。醉。た。遊。人。の。晝。を。月。夜。の。哥。淨。瑠。璃。一。盃。す

すつた青二の夜道を晝と衣領もどを作。花車がぶあしらい
を口惜く。一越わげての悪口。山州がぬらしを悦んで。聲を呂
よ。おとして。の友私語。藪の下。の二八局。堀のぞめき。も。た。ば。こ
のめ。の。言。傳。え。だ。い。の。ち。か。い。内。よ。へ。ほ。か。へ。り。よ。ど。開。關。已。來
の拾言葉。茶屋の五法。か。い。る。事。な。し。有。が。中。ま。わ。り。道。し。て。わ
み。笠。ぬ。が。で。祇。園。様。か。が。む。や。つ。の。大。か。た。喉。よ。げ。の。仕。た。を。れ
もの。夜。も。扇。子。を。頭。挿。坊。の。此。邊。よ。且。那。あ。る。を。恐。る。し。也。惣。じ
て。色。處。の。本。よ。り。流。と。立。て。や。り。ば。あ。し。な。る。筈。と。い。い。へ。ど。此
邊。の。遊。客。共。ぞ。か。か。し。け。れ。坂。東。聲。に。二。本。き。め。た。る。源。五。兵。衛
殿。い。と。ま。乞。し。て。出。ら。る。れ。ば。權。大。僧。都。と。見。え。し。山。伏。入。か。い
り。て。二。階。へ。峯。入。す。る。襖。一。重。よ。角。内。が。ね。ぢ。髭。な。で。ら。れ。て。余
念。なき。大。笑。ひ。こ。な。た。よ。輪。珠。數。持。た。る。禪。門。が。今。往。生。と。床。入

する。座敷より和尚の唱明聲で。流行ぶしやらるゝ木戸より。百と見へて。小便くさき男を引こむ。往る観音様より。まりへで。来る仁王の。手やすがる。口熱の。薫鉄脇香の。香助。出入の。駕昇でも。得意の。灯心賣でも。わたるを。さいはひ。笑ひかけ。一人。よても。もらさぬ。仕かけ。さなければ。山の神が。あれ。亭主が。まかむ。同じつとめ。女といひ。ひか。がら。か様の。休の。一入口。おし。かるべき。よ。馴て。の。それでも。住吉か。さしの。姫松。早青と。三十で。ふり袖着も。有。か。する。遊。何の。味も。わんばい。も。有。まじき。事ながら。髪切指切も。あり。血判。替紙も。絶。す。こは。いか。よ。と。去事。知。又。問。しか。ば。二軒。茶屋の。豆腐と。答。へ。られ。き。扱の。馴染。だけ。で。あ。た。し。か。なる。を。喰。べ。かり。ぞ。と。悟。を。開。き。侍。る。

(九) 街賣女色との段

街賣女色と。法花と。説。れた。れば。天竺。も。有。り。北方の。佳人。一度。か。へ。り。み。れ。ば。人の。城。を。傾。と。詩。又。諷。へ。ば。唐。も。勿。論。和。朝。三ヶの。津の。遊離。大夫の。高。き。司。より。天職。鹿。戀。の。中。通。り。月。の。一。ツ。影。の。二。ツ。三。ツ。ま。ほ。も。黄昏。時。の。夕。良。の。白。顔。見。する。草。屋。ひ。じ。き。物。と。袖。す。て。よ。雲。屋。根。ふ。ける。惣。嫁。まで。戀。の。切。賣。情。の。夜市。ま。だ。其。外。も。召。せ。く。め。せ。く。賣。もの。の。子。息。を。賣。て。野。郎。と。し。娘。を。賣。て。は。山。と。な。す。む。か。し。の。人。賣。人。買。と。て。鬼神。程。よ。か。そ。れ。し。が。山。樺。大。夫。の。辛。き。世。を。今。又。泣。する。哥。念。佛。今。の。人。賣。人。買。も。何。國。の。辻。も。と。ころ。せ。く。山。賣。あ。れ。ば。新。田。賣。親。を。賣。て。の。死。一。倍。主。を。賣。て。の。似。せ。判。する。文。道。賣。ば。武。道。賣。儒。書。も。神。秘。も。佛。法。も。こ。ぼ。ち。賣。よ。ぞ。成。よ。け。り。い。か。よ。下。れる。

世なりとて。天地形をあらためず。日月光明らかなり。まかる
博士知識藝術師。隱遁道者農工士。皆商人と成事い。どふし
た暗き夜市ぞや法の灯かき立て。此店見世を照さんど。思ふ
も世話の中買か。孔子の頭痛原憲が欠。張良が若隱居狄人傑
が狸寝入も。こんか所が此なものや

(十) 此方より角立ての段

此方より角立てむかひねば。先よ牙かむ謂ひなし。上世中古
夫婦男女の數。幾億万人ぞ。其中又節を立。貞を守るもの。指を
折て筭ふべし。まかも妓女の中。數有事い何事ぞなれば。あま
たかひす枕の内よ。誠をさだめて亂せる心を貞まおもひわ
らたむるゆへなり。上代に素人の中よ有し。親和のつよき
よ出たり。中比より素人よ貞あき。彼無理すくめの婚禮ゆ

へぞ。いまの世も賣女の中よ。金づまり義理あひとないへど
貳人心を見ださで。又臥あり。腸目よりの狂乱のやうな笑
ひ罵ども。死を輕んずる所いさぎよくあはれ也。これをわら
ひそしる輩い。どふぞならん死んでみや

(十一) 浪ばかりこそその段

浪ばかりこそよると見へしがと。詠せし。須廣明石のくら
がり。みがしれ出ると讀し。木賊山の有明さる。同じ月なが
ら所よよりておもしろく。わけて武野藏の草より出て草よ
入。月。虫の聲も高調子よ隣をは。かからず。露も大粒よて。余所
より耀めきつよし。見る人の心も。空とひとつよ成て。寛濶な
る。ひかふ境界よまたがふ魂成べし。葉月の中の五日もろ
こしも大和も。詩作り哥よむ人の。宿よ寝るいなし。終夜友よ

さそのれて。興も乗ずるの望風。願錢もなき童も霞まどひせ
 ず。病なしの奴婢も隙ありながら居眠らざる。東坡居士の
 いへる造物者の無盡藏か。爰も中橋邊も人の家の賄ひする
 男。伴ふ人もなく。夜更まであてがれ歩行。往還も稀ようそさ
 びしく成しまし。我も家路をいそぎ。足早もどりける。沙
 留あたりのほのぐらさ方より。ふり袖着たる女の。色白く品
 かたちのさもしからぬが指出て。ふるひ聲して。見かけてす
 上ます。は情あれかしといふ。男の思ひがけなく。何事よかと
 いへば。たいはたすけも鳥目少し給れかしといふ。男扱の
 此頃夜鷹とやらんいふものよこそ。何もせよ今日の心さ
 しある日なり。有合たるぞ幸ひと。逸路打おけて残らすとら
 せける。此女左右の手をうけ。雨傘とまやくりもあへず。不

審も覺て。いかまかくまでの歎くと問ふ。□□□□かく
 はめぐみも預りゆ上のつしますかたり参らせん。みづから
 の涙人のひとり娘もて。終もかゝる業も出たる身もあらず。
 母もていもの。去年相果。年老たる父親ひとり。殊も病の床
 も臥て持合たる雜具も賣代なし朝夕のけふりもたえと
 なる。よつき。隣あたりよりすしめられ。此比の身過のため。
 夜くちまたも出て。往還の人も袖ふるれば。その日を送る
 儲のありと聞しまし。やる瀬なき貧しさ。耻を忘れて今宵
 此業も出参らせしへども。まつけざるゆへ。又いふもはゆく
 て。宵も人も近づきかね。とかく夜をふかし。もはや宿
 めかへるべきが。かくて歸たれば。明日の便あければ。是
 非なくそなたのは袖も取つきいふ。かほどのはたすけ身も

とりてのよろこばしさど。涙ながらよ語るよ。此男も共よ泣て。あくる夜必と契りてわかれぬ。扱それより夜をかさねて。小宿をもどめ出合しよ。心だておとなしく。いひ出す言葉もあさはかなく次第く。よかわゆさまさりけるよ。ある夜女のいひけるん。我身かゝるあさましきわさを。親よえられんも口惜く。そのかたと夫婦の約束いたせしよし。つしまずえらせしへば。老後の悦び是よ過す。何とぞ逢参らせんと願われしどかたる。男も今いともぬれ衣。かさねしうへのおもき縁。いざ諸共よつれたちて。親の在家へ行てみれば娘がいひしよいさゝかたがらず。親仁おもき枕をあげて手を合て。我等いいはれある者ながら。幸ならぬ事彌増て。かほども落ぶれし。まかしむすふ縁ありてぞ。娘のそなたよまかせぬら

ん。今の浮世よ思ひをく。事なしと古き衾の下より。脇指一腰出して。最期まで猛武のまゐるしよ。放さじと心がけたれど。今のうれしさ聳引出し送りしと渡され。忝しとをしいたゞ。其日の家よ歸る此男が主人の道具好よて。取わき此比指料の求えけるよ幸と見せければ。本阿彌へ出し吟味の上。菊一文字の助宗よ究り。世よ稀成上道具と成ければ。主人も日比の勤を感じ。今日のむすびを悦で。家屋敷よ金銀添て此男よとらせ。娘も親仁も迎て心安く看病しぬ。其年のくれ親仁のながく此世を退ぬ。扱も泉岳寺の土よ埋むと聞し。たしかよ大石のくだけよやあらん

(十二) 月の夜比をの段

月の夜比をいとひ。鬨を悦ぶ及が鴈繩よ捌れて。この川波よ

徘徊する女。二條橋邊のきやつきやの姉妹。堀川の關なんど
 ぞ。逸物の餌鳥とかや。往來袖をひかへ園の小蝶とたれふれ。
 六の巷は地藏の誓をなし。北野の塔を半分へしてと直切れ。
 よのか時雨の悪口をまぎらかす。たしりの鐘の數かさある
 客よの見送る目もとよつとめの外の泪をふくむ思ひく。い
 づれ葎の宿は寐もしなんと讀しからの。石の枕もなげやり
 ますべからず。又朝ぼらけより黄昏まで。所さだめすまどひ
 歩行。日向臭き哥比丘尼の有さま。むかしは脇挾し文匣は巻
 物入て。地獄の繪説し血の池の穢をいませ。不産女の哀を泣
 する業をし。年籠の戻りよ。烏牛王配りて。熊野權現の事觸め
 きたりしが。いつの程よりか。かくし白粉は薄紅付て。付髪帽
 子も帯幅の廣くなり。えらぬ貞みて思ひせ風俗の空目づか

ひ。歩み姿も腰すへての六文字。米かみで菅笠が歩行と。笑れ
 し。のきのふよなりて。林故が笑ひ顔が。大掖の芙蓉と見へ。長
 春がうしろつきが。未央の柳とながめらる。篋も乗て川狩を
 うれしが。り。饅頭も飽て西瓜好する僻者ども。い。さつぱりと
 したるが。おもしろし。と。齋明も精進かためよ。ま。くもの
 なし。と。是をもて。あそぶぞかし。其外巾着の。込。荷葉のひら
 ま。やらも。馴て。い。おなし。思ひ川。西の唐の人をも招きと。ひる。
 丸山の穂すし。き。東のゑぞの。夫。靄。青森の糸柳。つ。の。濡。衆。浦
 うらの櫛もの情を賣。色を。價。迷ひを主として。彼。ま。た。が。ふ
 の身を損するの。斧。容易からず。思ひれん。い。此世ならぬ。たの
 し。み。更。角。捨。べき。事。の。す。て。ら。れ。ぬ。もの。な。ら。ん。か。し

(十三) 下地礫土よの段

下地礫土と齒を過せば。草生ばかりよくて必ず空實のみ成
 がとどく。わろがしこき者のなまじい書物をすきて辨才
 成の文盲成頑ものよりの世の害なるものぞ。愚者の片意
 地なるは。人もそれと見て用ひず。辨才有て古語を引。歴史を
 かたるまの。其人をばさまて能人とも思ひぬとも。佛の教も
 此道理あり。聖人のかくのたまふてのと經書を暗し引。證據
 たしかまいへ。十人又九人のそれ又信を起すなれば。世の
 邪摩といふのは。是の聖と佞との紛者をえたる人稀なれば。世人
 皆まよふ。佛教も聖賢のまめしきも。用ゆる處あり。用ひざる法
 あり。それを彼邪佞の者めが。潤色又成事ばかり引出してい
 へ。余の事えらざるもの。扱の佛の法もそれよきなり。
 聖人の教も此外なしと思ふ。琴柱と膠し。株を守るのあや

まりと笑ひる事ぞ。正人邪法を説。邪法が正法となり。邪
 人正法を説。正法邪法と成。天の水を吞て甘露を降し。蛇の
 水をのみて毒を吐。えかれ下手の醫者の藥のまぬが養
 生となり。未達の坊主の教。聞ざるが得法なるべし。談義へ
 参れば。後生願ひと思ふ。あはれ成事ぞかし。口拍子よく法
 を價坊主の。多くの役者の物真似又至る。只おかしくてすめ
 ばよし。現世も來世も益なき事。談義を聞て何とする事ぞ。
 但し宿し世話して居るより増なりと思ひ。川原へ行て狂
 言芝居をみるべし。それ又結句悪し。善すすむ信も
 出ぬべし。大形それも錢出して狂言見るは費と合点し。和尙
 又物真似させて見るが。錢安まつくと利簡又走者も多く見
 へたり。現世をいど以後世を心がくる身の。それ程世智辨な

らば。眞實の菩提に入べきや。祿其中ありと聞て。祿の爲は
學文するが。眞儒といふべきか。法の中は食ありと聞て。食の
ためは説法するが。眞の出家か。くすりをのむは命をたもつ
ためなれば。上手の醫者をたのむべし。人道を學びては。人
なる事なれば。眞儒を撰て磨べし。成佛の道は。善知識あり
ずんば得べからず。といふて下手の醫師をそしるはもあら
ず。俗儒賣僧をよくむはもあらず。渡世の便は有べきは偽虚
をして世をあやつり。人をまよはす所。不便ありとの獨言な
り

(十四) 鳥もなく鐘もきこへぬの段

鳥もなく。鐘も聞へぬ里もがな。ふたり寝る夜の陰家よせん
とい。菅原の神詠情の余るは哥ぞかし。その神心ゆへは

羅綺之爲三重衣

管絃之在長曲

妬無情於機婦

怒不関於伶人

此朗詠の心は。うつくしき妓女の。姿尤態として。輕やかなる
立まわりなるは。裝束の重たさよ見ゆるぞ。この様なるや
さかたある女に。天の羽衣などぞ似合しかるべきよ。あ
のやうなる厚重絹を。織出したる機織頭が。悪きとの上の句。
それさへあるは。妓女の草臥もかまはず。鼓打笛吹ものが。よ
い加減は。囃子とめずして。心のつかぬが腹の立といふ下の
句なり。これ仁愛あまじ。戀も移る心也。此詩を日よ一度唱ふ
るものを。三度かけて守らんと誓ひせ玉ふ。は一代の製
作。數あれども。此情を第一と思召と見へたり。かけまくりも神
の作。觀通しも。男女の眞の契の外は。あらじと。見及ひ聞傳へ

しを書つたへて。愚案の評注をくひへて。梓も彫しむ。事のく
 だく。まきい老忙もゆるし。文のふつゝかなるは。玉淵をま
 らざるも。死じ玉へ。地も埋れし花の種の。千樹の頭よのぼり。
 天よかゝる月の影の。萬水の底も照れる。足の甲の灸が。眼の
 かすみを拂へば。佛さまふがむ手が。糸こせぬ所へどいく。そ
 れの。慮外案外分別の外なり。たゞ。智恵の。髪鏡が狭く。雪隠の
 假名つかひを。いや。とあらためたかる。生物知。又の殺生
 きんらんと覺て。片意地張通す。見佛文盲なる輩のためよ。周
 くて。僻まぬがよかるべき。このものがたりのみ。佛の意を傾
 知。一筋の毛穴も。大千界をとり込。聖の智悪を併呑て。万人の
 心を方寸も収し人よ。中事よのあらず。其上我身ながら己を
 みるよ。人を教ゆる身操もたらず。袖で鼻かむ才の備われ共

瓜田の履のふみ所定らぬ自墮落者。すれば此書も必との見
 玉ふべからず。取人の取て得も有なんか。捨る人の捨て損も
 なからんをや

明治廿四年四月廿三日印刷
明治廿四年四月 日出版

編輯兼
發行者

日本橋區通四丁目四番地

內 藤 加 我

印刷者

日本橋區新和泉町一番地

瀧川三代太郎

發兌

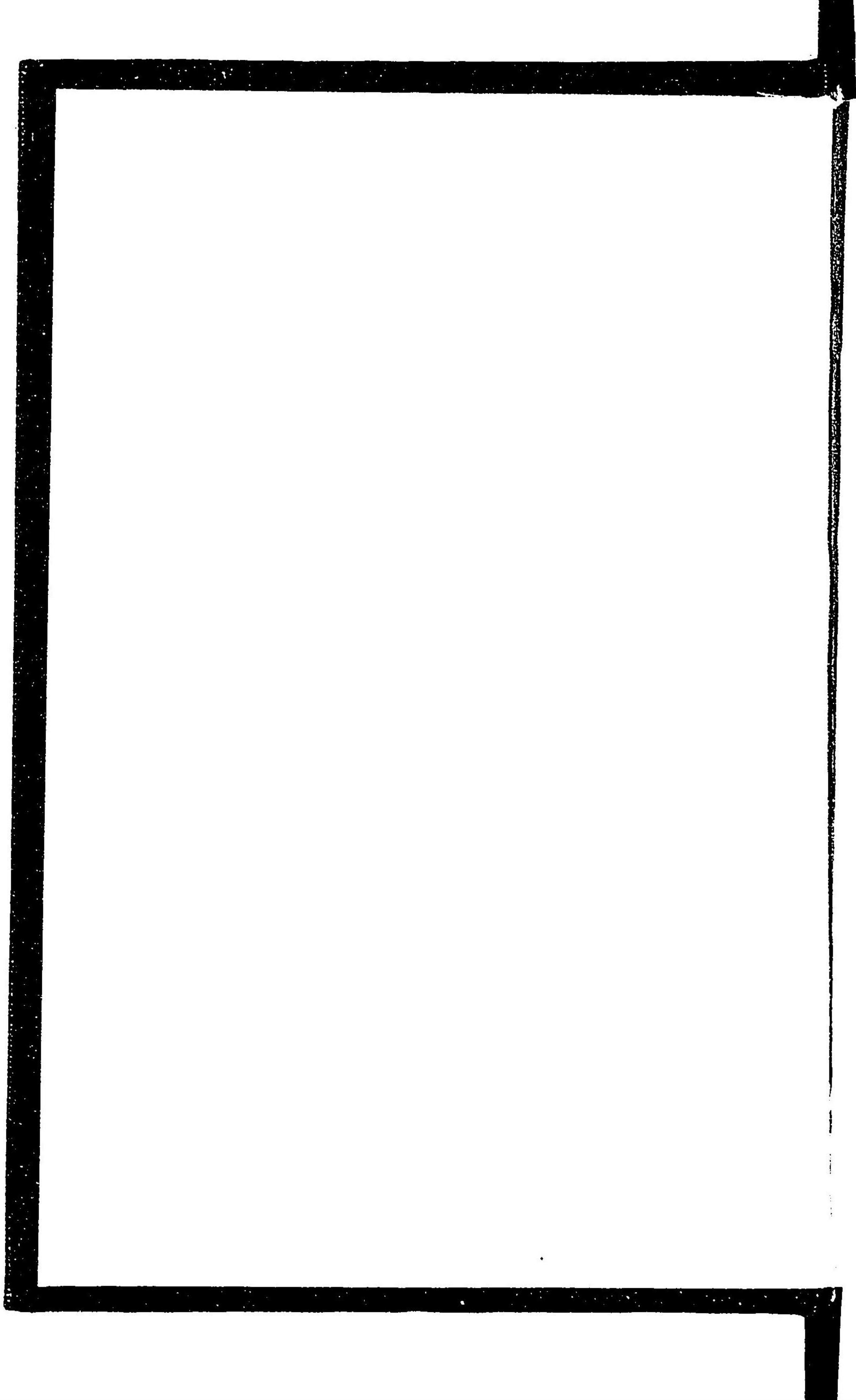
日本橋區通四丁目四番地

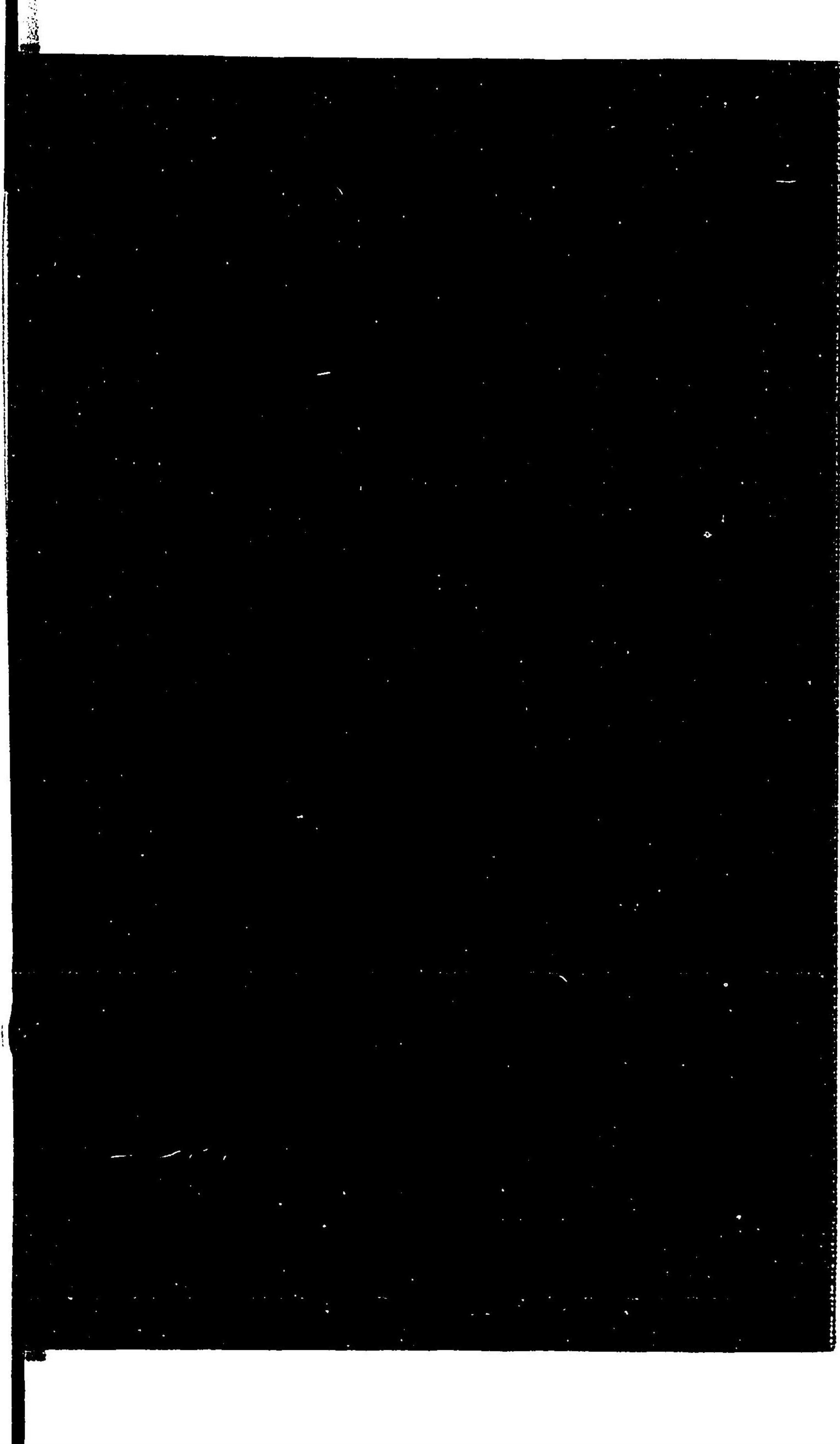
金 櫻 堂



.....







913.52

M232e

089244-000-9

913.52-M232e

艷道通鑑

增穂 残口/著

M24

DBM-0535



